

つながる・広がる町民活動の二十年②

活動団体のあゆみ

～まちの暮らしの変化とともに～

芽室山の会

登山普及を目指して

日高山脈への登山道をつくり

地図に「伏美岳」の名を刻む

文章 上 蔦 寛さん（芽室山の会会員）



伏美岳山頂にて日高山脈を望む

町内に複数あった登山グループがひとつになって創設しました

一九五〇年代後半、芽室町役場や帯広信金芽室支店などの職員に熱心な登山愛好者がいて、一部の間で登山がブームとなっていました。当時、二十代の役場職員が中心となり、芽室体育会にあった山岳部を同好会組織として独立、町内にあった職場ごとや農家などの同好会グループに合流を呼び掛け、「芽室山の会」を創設しました。会員数は八十名程でした。

自動車も少ない時代で、自動車を利用したりトラックに運んでもらったりして、山に行っていました。然別湖や狩勝付近のハイキング的なものから、大雪山系、日高山系、夕張山系などにも足を伸ばし、町内の登山熱は一層の高まりを見せました。

登山の他にも、山岳写真展、山岳映画会、幻灯の夕べ、冬山訓練会といった幅広い行事を計画するなど、活発な活動が展開されました。

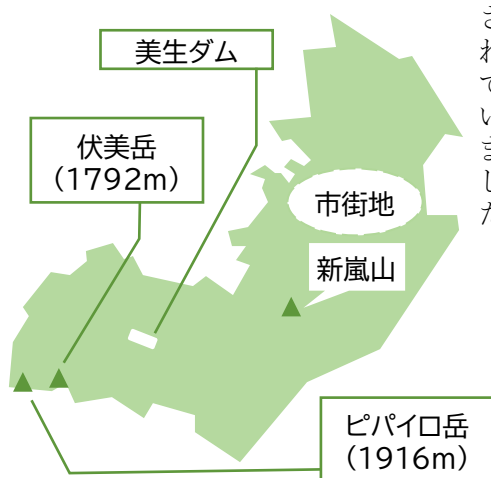
みんなが日高山脈を楽しめるように、安全な登山道づくりを始めました

会創設当時、芽室から日高の雄大な山並

みを眺めることはできましたが、芽室から日高の山に登ることは容易ではありませんでした。健脚と熟練を要する、難易度の高いルートでした。

一般の登山普及を目的に始まった会でしたから、皆が安全に日高の山を楽しめるようにしたいとの強い思いがありました。創設時の勢いもあり、美生川支流のニタナイ川上流から尾根つたいにパイロ岳を指す安全な登山道づくりが、会員の発案により始まりました（地図参照）。

しかし、会員はサラリーマンや農業者で構成されており、頻繁に山に入ることはできません。どうしても仕事の合間や天候を見計らったことになり、年間で、年間十日ほどしか作業できず、なかなか思うように進みません。当時作業に携わった会員は「何度止めたいと思ったことが…」と回想されていました。



「伏美岳」の名前は、後に営林署を通じて国土地理院の五万分の一の地形図に、山名と登山道を記載していただきました。

1960 会員約80名で創設

1961 会と北海タイムス社共催で、初めての芽室岳山開きを実施、122名が参加

女性参加者は30名でした。その後、年々女性参加も増えていきました。

1962 日高山脈系ピパイロ岳への登山道づくり開始

1977 伏美岳までの登山道開通

町の事業として、国有林内の敷地を借り30人が宿泊できる山小屋が建設



緊急時の避難場所として、安全登山に大きな役割を果たす山小屋。登山道の草刈りや山小屋の維持管理は会が担いました。

1978 伏美岳町民登山開催

1984 ピパイロ岳までの登山道完成

2016 台風上陸により伏美登山口までのトムラウシ沢林道が被害

2017 登山道整備と山小屋清掃の際に崩落状況を確認



2019 林野庁による林道復旧工事開始

代表 潮田 満
活動期間 5~10月 月1回程度(日曜)
活動場所 道内各地の山
会費 年2,000円(別途参加費あり)
夏山登山を楽しみ、登山道整備もしています。

作業は四、五人で行うことがほとんどでしたが、時には芽室高校山岳部にも手伝ってもらい十人規模のこともありました。開始当初は林道もない状況で、作業現場まではテントを担いで沢を遡行し、作業に二日以上かかることもありました。

登山道づくりは、五月の残雪期に山に入って赤いテープを枝に付けておき、雪解け後、それを目印に進められました。熊の縄張りに踏み込んでいるわけですから、当然その糞や足跡は頻繁に見られました。

ピパイロ岳への登山道は尾根をたどって進んでいきましたが、地図を見ると無名峰があり、作業はの上を通過します。目指すなら名前があった方がいい。登山口付近の地名が伏美ということから、その名にあやかり「伏美岳」と命名しました。「我らが伏美岳」となり、作業の張り合いになりました。

一九七七年、岩が露出した伏美岳ピークまで登山道がつながりました。眼前には北日高山群、中部日高山群、十勝、

夕張、大雪の山群が大パノラマを形成し、胸の高鳴りを覚える光景でした。この感激に一同抱き合い、血豆のできた手で固い握手。誰からともなく万歳の声が発せられました。翌年からは町民に親しんでもらおうと町民登山を開催、多くの町民が頂上に立ちその展望に心を打たれました。

その後、伏美岳からピパイロ岳までの約九キロは勾配もきつく、クマザサやハイマツが密生し難作業が続きましたが、七年後ついに完成しました。

台風被害を乗り越えて

二〇一六年、台風が北海道に上陸、その影響で伏美岳に続く林道も被害を受けました。翌年、毎年実施している登山道と山小屋整備を実施した際には、倒木で道が塞がれ、流れた水が深い溝を作り、小さかった沢は大河のようになっていました。チェーンソーで木を切り、川には丸太橋をかけました。現在は、工事期間以外であれば通行できます。機会がありましたら山頂からの絶景をお楽しみください。

芽室町どんぐり会

親が集い、ともに学ぶ

障害をもつ我が子が地域の中で

豊かに生きることを願って



札幌へバス研修旅行

あるお母さんが、保健師に相談したことがきっかけでした

今から半世紀前、自己主張が充分にできない我が子の将来を案じた親が声を上げました。「親の会のようなものを作りたい」と保健師に相談し、周囲に賛同の呼びかけを行いました。

当時該当される方は五十名を越えるのではないかと思われましたが、全員に呼びかける時間もなく、設立してから声をかけては、というアドバイスもあり、会員十七名、賛同会員二名で始まりました。

当時、障害者への理解は広がっておらず、親の会とはいえ、子どもを育てながら初めて知ることも多い状況でした。そのような中で、学習会、研修会、施設見学、懇談会など各種行事を活発に行い、まちなかでの議論が深まっていく機運を作っていききました。議会でも取り上げられるようになりました。

夏の商工まつりや産業観光まつり、芽室神社秋まつりで、手作り品販売の出店も行いました。活動費獲得と会のPRも兼ねてのことでしたが、出店をとおして町民に会を覚えてもらい、声をかけてもらえるようになっただけでいいました。様々な職種の賛同会員の助言があったので活動の広がりました。

活動当初は不安な気持ちで、うまくいくだろうかと心配する会員もいました。しかし同じ悩みを持つ親が集まり互いに励まし合い、情報を交換するだけで力強い心の支えになっていました。

そうして行事を重ねるたびに会員の意識が強くなっていきます。十五周年記念誌の中では、「これからは心身障害児者が、健常児と共に生活を営むことができる社会づくり、施設づくり等を希望する親として、自分の子供だけのためでなく、もっと広い視野に立って同じような悩みをもつ他の子のためにも、またこれからの子のためにも手をつないでいきたいと思っています」との会員の声が寄せられました。

現在の「アットホームめむろ」「柏の里めむろ」創設につながる、小さな作業所活動

創立十五周年の節目に、学校卒業後の進路として、「町内に障害者が働く施設があつてほしい」という声が集まっていききました。

会としてアンケートを実施したり、協議を重ねたりする中で意見をまとめ、商工会会長や町議からも口添えを得て、町行政にその意向を伝えました。

1974 設立総会開催

芽室町児童会館の一室を拠点に活動を始めました。

1990 芽室神社前の町職員住宅を改装無認可の通所型小規模授産施設開設

1992 芽室小学校南側に地域共同作業所「アットホームめむろ」施設新設

1995年には、通所者たちを中心に、自分たちのやりたいことを実現する青年サークル「ほのぼのクラブ」が発足。仕事以外でも地域との接点をとボランティアスタッフが集まりました。障害を意識せず共に活動していきました。

1997 作業所法人化の賛同を広げ、自己資金を作る目的で、実行委員会形式で映画上映会を実施

2002 アットホームめむろが法人化、社会福祉法人柏の里めむろ発足

～社会福祉法人柏の里めむろの沿革～

2003 旧西土狩小学校の跡地に知的障害者（通所）授産施設「オークル」開設

2009 アットホームめむろパン工房「リすドン」開店

2024 50周年記念事業として、障害を持つ当事者と町長との対話の場「私たちの未来♡ミーティング」を開催



1回のリハーサルを経て当日を迎えました。伝えたい思いを懸命に言葉にする姿がありました。

代表 森 元幸
 会費 正会員 年2,400円
 本人会員 年500円
 賛同会員 1口1,000円以上
 研修会、日帰りバス旅行、スポーツ教室といった行事開催と、ふれあい交流まつりに参加協力を行っています。

町行政も前向きに対応する姿勢を示し、道内先進施設の調査・視察、町内在住者の施設完成後の通所希望調査を実施しました。その中で、「準備段階として小規模な作業所活動を始めてもらおうと進めやすい」との話がありました。そこで、さし当って必要としている人を中心に作業所を発足させ、施設要求の核を形づくっていくこととなりました。

翌年、芽室神社前にあった旧役場職員住宅が空き家になったのを機に内部を改装、こ

こを拠点に通所者四名、指導員二名で作業所活動を始めました。その後、町が設置者として、現在の位置（芽室小学校南側）に地域共同作業所「アットホームめむろ」が新設されました。

製品をとおして町民とつながり、活動への理解がさらに広がりました

小さな作業所だった開設当初から、指導員は通所者の励みになるよう賃金を支払いた

探しました。どんぐり会や役場のつながりで、畑作業やスニーカー洗い、裁縫、町敬老会の記念品作成、新嵐山荘売店での木の玩具販売などを担いました。製品づくりには、芽室赤十字奉仕団が継続的に支援してくれました。

また、どんぐり会が活動資金づくりのため行っていた資源回収事業を引き継いだことから、石鹸※やボカシといった環境にやさしい製品づくりに広がっていきました。これらの製品をとおして

「作業所が良いことをしてくれる」と感謝され、多くの協力者や支援者を得るようになりました。現在どんぐり会でも、百名を超える方が賛同会員となっています。

会では、当事者、家族の声を届けていく場として、今後も町長、町議との意見交換を継続していきます。

※石鹸は、集まった廃油から作成。消費者協会の協力で、より良い作成方法になりました。ボカシは役場からの依頼で作成。生ゴミ減量が当時の町の課題でした。

育児ネットめむろ

地域みんなで子育てしよう！

ファミリー・サポート事業を

町子育て支援課といっしょに

文章 小池 和枝さん（代表）



毎年恒例、会員交流餅つき

「子育ては母親がするのが当然」から、「地域で子育て」へ

一九九〇年代当時、保健師が健診などで育児中の母親と話をすると「転勤で引っ越ししてきたばかりで知り合いがいなく、子どもを預かってもらうところがない」「自分が歯医者や病院に行く時、冠婚葬祭の時など、一時的に預かってもらえるところがあるといい」などの声がありました。担当していた保健師も、自身の育児経験から預けることの重要性はよくわかり、実現したい気持ちでした。

一九九六年の母子保健計画策定の際、住民アンケートや関係者会議などで必要性が協議されました。先進地視察も実施し、二年後、事業として予算化されました。

しかし当時は「子育て支援」ということが浸透されておらず、「子育ては母親がするのがあたりまえ。甘やかすのでは」「預かってけがしたらどうしよう」「虐待されたらどうするの」などの意見もありました。少しでも多くの人に理解してもらおうと、担当職員や保健師、設立にあたって採用されたサポートリーダー二名が関係機関で説明をしました。町民にむけて説明会も開催しました。

二回行われた説明会は、参加者で会場がいっぱいになりました。参加者からは活発な質問や意見があり、ファミリー・サポート※の必要性を再確認しました。

町民が「地域で子育てをしよう」と、皆のために協力する気持ちが強かったと思います。このことは、私が芽室町に住んで、人と関わっている中で、とても感じる部分です。

こうして、お母さん方の「預かってほしい」という声と町民の「地域で子育てを」という気持ちがひとつになり、依頼会員九名・援助会員七名・両方会員十名の合計二十六名でスタートしました。会員から運営委員を選出し、会員の声を受けとめて活動していきました。

※「子育ての手助けをしてほしい」「子育てのお手伝いをしたい」という気持ちの橋渡しを行うしくみ。中学生以下のお子さんを対象に、子どもの預かり、送迎等の育児のお手伝い、産前産後の家事のお手伝いを実施。

事務所は保健福祉センターあいあいの1階。育児用品リサイクルも実施。



1998 ファミリー・サポート事業が
予算化され、運営団体として
育児ネットめむろ発足



会員向け研修会を開催しています。

1999 会員の声を受け、
産前産後サポート事業開始

2005 小学生の放課後の居場所として
会員有志による「ひばりワクワ
ク広場実行委員会」発足



2010 町補助金を原資に
「パパスイッチ事業」開始



腕相撲、紙飛行機飛ばし体験、
川下り体験、父親料理教室、
絵本読み聞かせ講演会等

2016 内閣府特命大臣表彰子育て家族
支援部門授賞

2022 第4日曜日、中央公民館にて
「みんなのあそび場」開始



代表 小池 和枝
事務所 保健福祉センターあいあい21 1F
月～金開館
会費 年500円
会員交流イベントは随時開催

行政と連携しながら活動が町内に浸透し、町民が出会い、心通う場となっています

「ファミリー・サポート」を信頼してもらうために、行政はきちんと考えてくれました。会員向けの研修会の開催や、迷った時、悩んだ時の相談窓口、活動中の保険を考えました。

また、活動が浸透していくように、町広報誌や新聞で活動の様子や会員の声がとりあげられるよう繋いでくれました。その情報を読んだり会

員から話を聞いたたりして、徐々に会員は増えていきました。援助会員は幅広い年代の方が活動しています。最初は依頼会員であった人が、子どもの成長とともに子どもを預かる援助会員になることもありま

子どもを預かった経験が、自分の孫のお世話の時に役に立ったという方もいます。設立当初から今も活動し続けている心強い方もいます。預かった子は二十歳を迎え、「就職決まりました」との報告もあったようです。

七十代の一人暮らしの方が預かってくれたこともありました。また、「おじいちゃん大好き」というお子さんを預かる時は、男性援助会員や会員の旦那さんが活躍しました。楽しく遊んでいる子どもの笑顔を見ると、大人も笑顔になれて癒されます。ですが、お母さんが戻って来た時の子ども達の表情が一番です。笑顔で抱っこされたり、頑張っている様子を見て安心して泣いてしまったりとあたたかい気持ちになれます。

活動の経験が、新たな活動に繋がっています

託児の経験から、子どもたちに知恵と身体を使って思い切り遊べる場所が必要だと感じた会員同士が話し合い、放課後の居場所づくり活動が生まれました。父親が子育てに参加しやすい環境づくりを目指した「パパスイッチ事業」、休日の遊び場が不足しているとの保護者の声を受けた活動も始めました。子どもとその家族の笑顔を見守っていただける活動をしていきたいです。

芽室町民歩く会

作ったマップを活用しよう！

町の魅力再発見＋交流・親睦で

「歩いて健康」の輪を広げる



芽室公園にて

役場と共にウォーキングマップをとおして
「歩いて健康」を実現へ

二〇〇二年策定の芽室町健康づくり計画「げんきめむろ21」のキャッチフレーズは「歩こう、動こう、活動しよう！」でした。この言葉に基づき、「げんきめむろ・てくてくマップ」を作成することとなりました。

作成にあたっては一般公募により町民十三名が集まり、芽室町ウォーキングマップ作成委員会が立ち上がりました。幅広い年齢層の作成委員が実際に町内を歩き、距離だけでなく目安となる時間や歩数、消費カロリー、そしてトイレの場所など便利な情報も添えました。

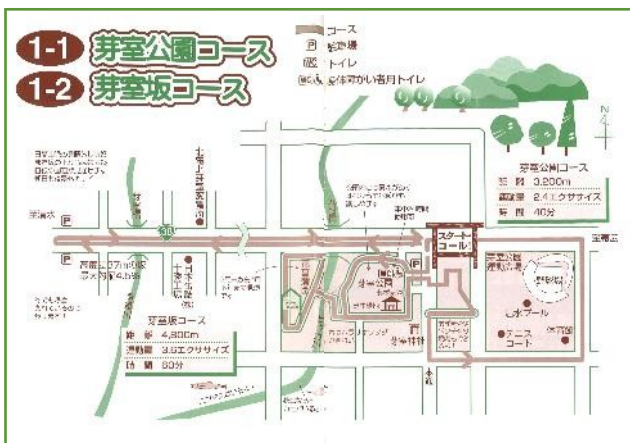
また、コースのポイントも記載しました。「遠く剣山や日高山脈が望めます」「野草の花や、野鳥の声が楽しめます」「コース沿いのガーデンングも見どころです」といった内容です。健康を目的にした事業ではありませんが、町の魅力も感じるものとなり、二〇〇四年にマップは完成しました。

一年かけ試行錯誤を重ねたマップづくりであり、関わった作成委員の思い入れも強くなり、「町民に活用してもらいたい」との声がかりました。

そこで、保健福祉課のサポートも受けながら、「町民歩く会設立準備委員会」を開催しました。作成委員だけでなく、社会教育課スポーツ振興係職員や町民にも参加を呼び掛け、実際にマップを使いウォーキングを楽しみました。道沿いの草花を眺めたり、自然とグループもできて話しながら歩いたり、参加者それぞれが満喫した様子でした。

こうしてマップ完成から半年後、「芽室町民歩く会」は、二十六名の会員で発足しました。本格的なウォーキングというより、楽しく歩き、仲間の輪が広がればとの思いでした。会員が周りの方をお誘いし、多い年で六十八名が所属、共に歩きました。

2012年改訂後のマップでは、16コースを紹介しています。



2004 芽室町健康づくり計画
2月 「げんきめむろ21」に基づき、芽室町が作成委員を募り、げんきめむろ てくてくマップを作成・発行、保健福祉課窓口で希望者に配布

5月 芽室町民歩く会設立準備委員会開催

9月 芽室町主催、芽室町民歩く会設立準備委員会共催
「げんきめむろ21」講演会開催
終了後、設立総会開催

2005年度まで、毎週木曜日と第1土曜日も活動していました。

2008 春期と秋期においてゴミ拾いを実施（以後定期的に実施）



2009 住民総参加型スポーツイベント「チャレンジデー」に協力



町SNSより

2011 芽室公園コースなど5コースが、「すこやかロードコースガイド2011」（北海道健康づくり財団発行）に掲載、全道に向けて紹介

2012 てくてくマップ改訂版発行

会がアドバイスし、コースの見直しや新たなコース追加を行いました。

代表 笹島 優司
活動日 毎週木曜
4~10月 9:00~
11~3月 10:00~
会費 年1,000円

歩くことを楽しみながら、町内のゴミ拾いも行いました。会の定期的な活動としては、マップをもとに毎週コースを変えて一時間程度、五キロ程のウォーキングをしています。年間をとおして活動するので四季の変化も楽しんでいきます。また「交流会」という名称で、町外の景勝地などに出かけて歩くことを楽しむ会も開催しています。オンネットや広尾といった管内や、富良野や美瑛といった管外にも足を伸ばしました。二〇一二年に

は浦幌の昆布刈石海岸を歩き、講師の説明を受けながらビーチコーミング（漂着物拾い）もしました。この時は東日本大震災の津波で流されたと思われる漂着物の発見もありました。活動をやる中で、郊外の道路沿いに多くのゴミが不法投棄されていることに気がきました。ささやかながら地域貢献として環境整備に一役買えればと、芽室坂コースのゴミ拾いをすることにしました。会の仲間と行うゴミ拾いは、楽しい時間でもありました。

こうして二〇〇五年から二〇二三年の十九年間の活動の中で、参加人数はのべ一九、五二八名、歩いた距離は合計三、八五三キロとなっています。歩いて話して誘い合って、仲間の輪が広がっています。歩くときは地域の情報交換をしています。仲間と歩く一時間もあつという間です。「会員になり、人と人との触れ合いがあるのがよいなと思います。会の方のお誘いで、

新たな活動を始めるきっかけもありました」と話す会員もいます。また、月一回、有志メンバーで集まる親睦会もあり、交流が深まっています。お誘いからの入会も設立当初から続いていて、移住者や転入者も溶け込みやすい雰囲気です。設立時の思いは現在の会員にも引き継がれ、「歩いて健康に」の輪が広がり、継続しています。

めむろ歴史探訪会

過去から現在、そして未来へ

町の記憶を調査、記録

郷土史の関心を深めていきたい



十勝発祥之地の碑の前で（大津）

郷土史の調査をとおして得た知見を、これからの町の発展につなげていきたい

二〇一一年、退職教員を中心にした二十一名で、会を立ち上げました。教員時代に、地域学習の単元で子ども達が使う資料集を作成した経験や、各地域の郷土史編纂に関わった経験がある方たちが、芽室にも郷土史を調査、研究する団体が必要だと感じたことが立ち上げのきっかけでした。

目指した言葉は「温故知新」です。郷土史をとおして新しい知識や道理を見つけ、現在の生活やこれからの町の発展に役立てたいという思いでした。発会式は町歴史史料館「ねんりん」で行われました。

一年目は「ねんりん」の施設見学、河北地区巡検、会員による講話等を開催し、初年度から活発な情報、意見交換等を行いました。

翌年以降は地域巡検として他市町村を訪れ学びました。これは芽室町の発展は十勝各地域とのつながりの中で養われたものであることから企画しました。

町が発行している芽室町百年史を、帯広市史、音更町史、芽室町八十年史と比較する勉強会も実施しました。記述上の誤りをまとめて、二〇一三年に役場に修正と付け加えの要望提出を行いました。

年に数か所の地域巡検、博物館学芸員など外部講師を招いた講演会・学習会、会員が調べたことを発表する会など、会員に限らず広く参加募集し活動していきました。会員が誘ったり、活動が広報されたりする中で、郷土史に関心をもった町民や町外の人も加入し、会員は増えていきました。

冊子『芽室の歴史探訪』発行へ

活動をする中で、他市町村が郷土史を伝えるマップや案内板、冊子などを作成していることも意識していきました。

芽室でも同様のものが必要ではないかと、町長との対話の場「そよ風トーク」をとおして町行政へ打診、その後、冊子発行に対して町からの資金支援が決まりました。

会有志で冊子作成のための実行委員会を設立し、調査、執筆を分担しました。一年を経て、二〇一六年十一月に発刊、三百部を配布しました。

役場関係課、教育関係、他市町村図書館へ寄贈、また約二百部を町図書館、めむろ町民活動支援センターを通じて希望者に無料配布しました。発行からひと月も経たず残りわずかとなるほど反響がありました。

2011 発足

2013 町総務課へ『芽室町百年史』への修正・付加要望書提出

2014 めむろ建設・まちづくり研究会加盟

景観遺産の保全・改修方法についての検討・調査を目的とした会で、役場都市計画課より加盟の打診がありました。

2015 町広報誌すまいる「芽室の歴史探訪コーナー」へ寄稿
会員による研究発表会を初開催

2016 冊子『芽室の歴史探訪』発行

2017 めむろ町民活動支援センター企画写真展「馬は家族の一員だった」協力
馬頭観音写真提供、解説文作成

2018 芽室町図書館開館30周年記念イベント「めむろ歴史講座」に講師として招聘

3回連続講座
「芽室町 アイヌの今と昔」
「幕末の探検家・松浦武四郎 芽室に2回来て3泊する」
「芽室町廃校校舎スライド紹介」

2025 映画「馬櫓の花嫁」上映会



上映会と同時に写真展を開催しました。

2025年度の活動

- 6月 広尾地域巡検バスツアー
- 8月 鹿追地域巡検バスツアー
- 9月 西土狩地域巡検
- 12月 会員の旅行談を聴く会
- 1月 十勝文学散歩（講師吉田真弓氏）

代表 柳澤 正弘
会費 年2,000円
(地域巡検時はバス代の一部負担有)
地域巡検、学習会、講演会、会員発表会など

同時期には会から役場へ提案し、町広報誌面で芽室町の歴史を伝えるコーナーが新設されました。

新設コーナーの紹介文では、「芽室町の将来を考えるには、過去の芽室町を知ることが必要です。まちの歴史を知ること、さらには誇りが芽生えることも期待しています」と述べられています。

現在も掲載は継続しており、執筆は会員で分担しています。

掲載時期	テーマ
2015/7～	農業、鉄道、人物、災害、軍や施設の歴史、公園の慰霊碑やアイヌチャシなど史跡
2019/9～	各行政区の沿革 (芽室太から始まり、大成で終える)
2021/8～	各学校の沿革 (西土狩小学校から始まり、芽室高校・白樺学園高校で終える)
2024/1～	各神社仏閣の沿革 (法運寺から始まり、現在も掲載中)

← 広報誌「すまいる」での掲載テーマ

仲間の輪が広がり、郷土史に触れる方法も広がる

主催の事業で特に力を入れているのは、地域巡検です。芽室町の助成金「めむろ人まち育て助成金」を活用して実施してきました。史跡をバスで訪ねる事業は管内でも珍しいこともあり、巡検先にお住まいの方が「自身の地元の歴史を知りたい」と参加し、地区の歴史を語っていただくこともありました。多町村の方々との交流も深まりました。また移動中のバス車内で、朗読が得意な会員にその地域

の郷土史にまつわる小作品を読み上げてもらうことがあり、大変好評でした。事前に調べる大変さはありますが、郷土史を学ぶ機会になっています。

映画『馬櫓の花嫁』上映会を企画した際には、馬との生活を伝える写真を集め、展示会も開催しました。実際に馬櫓に乗って嫁入りをした方にインタビューを行い、当日はその様子を伝える動画を映しました。

今後とも会員以外の方にも事業参加を呼び掛け、多くの人に郷土史への関心を深めてもらいたいです。

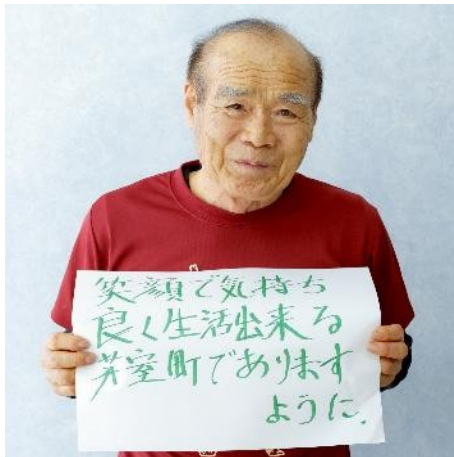
十年後の 芽室を語る

十年後、めむろは どのようなまちで あってほしいですか？

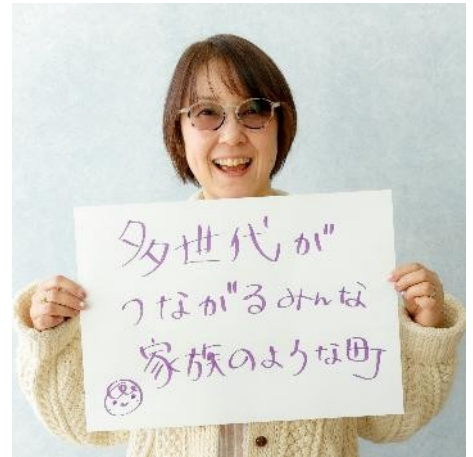
町内で活動している方々にお尋ねしました。



石黒みゆきさん
岸本千瑚さん
(芽室民謡会)



安藤功さん
(芽室フロアカーリング愛好会)



渡邊文子さん
(産前産後YORISOIハウス十勝サロン「縁が和」)



福井栄子さん
(芽室町トレーシー市交流協会)



中川ゆかりさん
(芽室合唱団)

こどもたちが、ゆかいで
気さくであたたかな芽室の大
人たちのゆる〜いつながり
の中で、幸せなこども時代を
過ごせるように。そのために、
大人もこどももくつろげる地
域の居場所があちこちにある
といいな。

図書館、公民館、コミセン、
商店街、お店、学校、体育館、
町内会、役場、公園、おまつ
り、道ばたなど、いろ〜んな

ところで、「ああ、どうも！
お元気ですか？」「あら！背
が伸びたね！」とにぎやかに
声を交わせるまちであり続け
ることを願っています。
ちいさい力の私には何がで
きるかな？

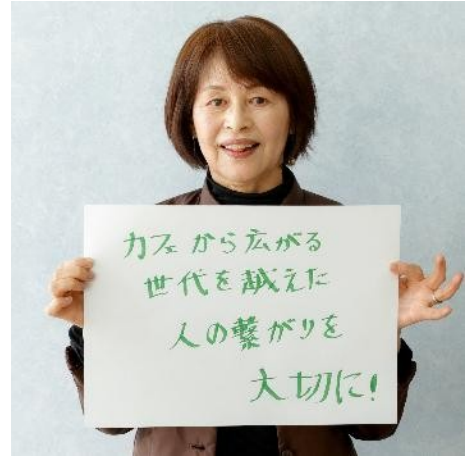
嶋野奈津美さん

(認定NPO法人

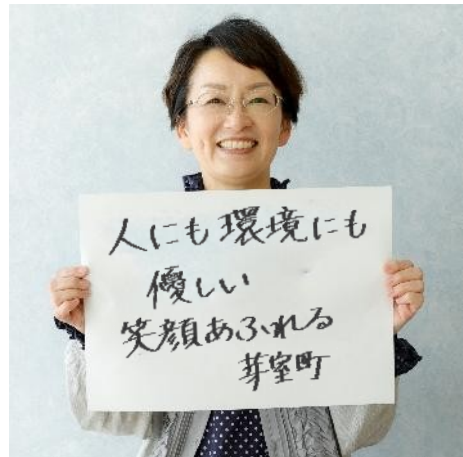
子どもと文化のひろば

ふれいおん・とかち

芽室ブロック)



片桐和江さん
(芽室町図書館喫茶コーナー
カフェ来★ぶら〜り)



酒井千都世さん
(帯広友の会芽室最寄)



山田美樹さん
(ひばりワクワク
広場実行委員会)



田原あや子さん
高橋美由紀さん
高野涼子さん
渡邊誉子さん
(手話サークルめむろ)

ボランティア活動十八年目、所属している会が立ち上がって十五年目。私は十年後には九十二才になる年で生死不明です。人生五十年、八十年、いや今百年と言われる世の中で、健康で百才を迎えられる、社会福祉が充実し、戦争のない平和な社会で、子どもから老人までが笑顔の絶えない世の中であってほしいと願っています。

つ育っています。もう少し六十代の人たちに関心を持ってもらえないかと考えています。ですが今の物価高の中で、働いている人が多いので、もう少し頑張らなくちゃと思いつつも、親しい人達が次々と亡くなり、次は私の番かよと終活最中の老女です。

桜井 芬さん

(サロンひだまりの会)

※会の前身は、女性の民生委員でヘルパーの有資格者が、社協の協力のもと行っていた活動でした。その後、二〇一一年(平成二十三年)四月に独立。自由な発想で立ち上がりました。

「災害」「社会変動」

により強い町になっていて欲しい。このため、基盤となる町民の絆を、皆さんと共に強い町にしたい。町内会を時代に合ったものにリノベーション(刷新)していきたい。ポイントは、高齢者と子どもが生き生きと活躍している町。

具体的には、①高齢者の移動手段が保証されていること。②高齢者の地域貢献や社会貢献がしやすくなっていること。③SNS、AIなどの学習の場が整っていること。子どもについては、①地域全体で子育てする環境が整っていること。②子どもが参加できる地域行事が活発であること。③子どもと大人が共に入権意識を高め合っていること。

十年後のこうした町につながる活動を、私は続けていきたい。

白銀孝志さん

(市街地町内会連合会)

